

ら、こんな手間のかかる仕事は、最初からやる気にもならなかったであろう。

私財を投じて収集した大量の標本を、1959年に地質調査所に譲渡した岡本博士は、その翌年には逝去した。それから約30年経ち、今日のようなオフィスオートメーション(OA)時代になって、やっと博士の遺志に応えられたような気もする。とにかく、岡本標本に関する記載鉱物学的研究の基礎資料が、一応出来上がったわけで、これら鉱物標本の研究は、むしろこれからである。

引用文献

福岡駐在員事務所 (1963) : 支所・駐在員事務所を尋ねて(7) 福岡駐在員事務所. 地質ニュース, no. 105, 45.  
 福岡駐在員事務所 (1966) : 創立20周年を迎えた福岡駐在員事務所.

所. 地質ニュース, no. 146, 1-6.  
 稲井信雄 (1965) : 岡本要八郎先生の写真に添えて. 地学研究, 桜井欣一博士紫綬褒賞受賞記念特別号, 31-32.  
 吉井守正 (1990 a) : 九州地域地質センターの未公表資料が語る戦中戦後史. 地質ニュース, no. 426, 42-48.  
 吉井守正 (1990 b) : 九州地域地質センターの岡本鉱物標本, 1. 岡本要八郎博士との出会い. 地質ニュース, no. 433, 45-50.  
 吉井守正 (1990 c) : 岡本標本にまつわる岡本要八郎博士と木下亀城教授の談話. 地質調査所研究資料集, no. 145, 30p.  
 吉井守正・原田種成 (1989) : 岡本鉱物標本目録応急修正版, 1. 展示標本の部. 地質調査所研究資料集, no. 127, 60p.

YOSHII Morimasa (1990) : The Okamoto mineral collection. 2. Revision of the list.

<受付: 1990年5月1日>

——新刊紹介——

“Epithermal Gold Mineralization of the Circum-Pacific—Geology, Geochemistry, Origin and Exploration.” (環太平洋の浅熱水性金鉱化作用——地質, 地球化学, 起源および探査), I および II (全2巻), J. W. Hedenquist, N. C. White, G. Siddley 編. Association of Exploration Geochemists Special Publication No. 16a, 16b (“Journal of Geochemical Exploration” Vol. 35, No. 1-3 および Vol. 36, No. 1-3 の単行本化), 447p および 474p, Elsevier 刊, 1990年.

現在の世界の金生産の大半はまだ南ア連邦, カナダ東部, オーストラリア西部などの先カンブリア時代の鉱床からもたらされているものの, 現在探査活動が最も活発に行われ, かつ, それに応じて, Ladolam (PNG), Gold Strike (アメリカ) などの金量 500 トンを超える巨大鉱床をはじめとする大規模鉱床の発見があいついでいるのは我が国を含む環太平洋地域である。

ここに紹介する論文集は, 昨年度以来我が地質調査所の研究員として活躍している Hedenquist 博士が中心となって編集した環太平洋地域の浅熱水性金鉱床に関する, 最近の調査結果・研究成果の集大成である。掲載された論文数は I, II 巻併せて26篇で, これらは, ①鉱床各論 (インドネシアの Kelian と Mt. Muro, PNG の Porgera と Umuna, フィリピン Acupan, Nalesbitan など, 日本の菱刈, チリの El Indio, フィジーの Emperor など8ヶ国の11鉱床について14篇), ②地域各論 (北セレベス, カムチャッカ, アメリカ西部, チリなど7地域8篇), ③トピック毎の論説 (岩石地球化学, 物理探査, 成因論総など4篇) の3つのグループに分かれている。

このように地域的にも手法的にも多岐にわたる内容で

あるが, 編集方針はきわめて明解で, 鉱床形成の規制要因をより良く理解するために地質的, 地球化学的, 地球物理的特徴を明らかにし, それにより今後の探査に役立たせることである, と編者の序言に述べられている。特に, 実際の探査に現実的に役立たせようという配慮はすべての論文に明らかに認められる。例えば, 鉱床各説の論文には鉱山側の未公表データが数多く含まれ, かつその多くには鉱床発見に至る経緯や類似鉱床の探査の為の提言が記されている。

一方, 巻頭言で R. W. Henley 博士が, 鉱化作用の真の理解の為に, その地域での造構運動の進化のどの段階で, どのような性格のマグマ活動によりもたらされたのか, などの総体的な地質的枠組みの中で鉱化作用を考へることの重要性を述べているが, この考えが編集方針としても貫かれていることは, 各論文に共通して見られる地質的記載の豊富さと, 対象となった鉱床タイプの多様さ (超高品位が特徴の菱刈, 酸性一硫酸塩型の El Indio, アルカリ岩に伴う Emperor など含む) とが示している。その結果, 1論文当たり平均35ページと, この種の論文集としては異例の長さになっているが, 総体的にはまだ明確な探査モデルが確立されていない現段階では, 出来るだけ詳細, かつ, 具体的なデータを読者に提供するのだという編者および執筆者の誠実な姿勢の表われといえよう。こうして, 本書は実際の探査に当たる人達への有用なガイドブックであると同時に, 鉱床成因論に興味を持つ研究者への優れた教科書でもあるという, 一見矛盾しながら実際には共通点の多かるべき2つの側面を見事に兼ね備えたものとなっているのである。

(地質調査所 鉱物資源部 富樫幸雄)

形成について…………… 357  
 Kazuhiko KANO: Note on the Late Cenozoic marine phosphatic rocks in Japan …………… 373  
 金子信行・坂田 将・町原 勉: 新潟県見附油田コア試料及び原油中の生物指標化合物…………… 383  
 須藤 茂・宇都浩三・内海 茂: 仙岩地熱地域南部, 乳頭・高倉火山群噴出物の K-Ar 年代 …………… 395  
 第199回地質調査所研究発表会講演要旨 (特集 地球化学データの社会的利用) …………… 405

地質調査所月報 第41巻 第8号

柴田 賢・東原雅実・村中英寿: 中央構造線地域におけるフィンガープリント法調査…………… 419  
 相原輝雄: 埼玉県南東部における沖積層と関東地震による家屋被害—旧出羽村付近の埋没地形と家屋被害—…………… 455  
 第 200 回地質調査所研究発表会講演要旨…………… 469

地質調査所月報 第41巻 第9号

Nobuyuki TSUCHIYA: Middle Miocene back-arc rift magmatism of basalt in the NE Japan arc… 473  
 安原正也・丸井敦尚・田中 正・石井武政: 筑波台地浅層部の土壌物理性と地下水鉛直流動—つくば市東にお

ける事例研究—…………… 507  
 第 201 回地質調査所研究発表会講演要旨 (特集 海底熱水活動) …………… 517

地質調査所月報 第41巻 第10号

玉生志郎: 韓国済州島の火山岩の K-Ar 年代とその層序学的解釈…………… 527  
 Takeshi KOMA and Yasumoto SUZUKI: On the chlorine content in the pore water from the central Niigata sedimentary basin …………… 539  
 金井 豊・坂本 亨・安藤 厚: 茨城県北東部那珂台地における新生界堆積物の化学組成と元素分布…………… 551  
 内海 茂・宇都浩三・柴田 賢: K-Ar 年代測定結果—3—地質調査所未公表資料…………… 567

地質調査所の出版物について

問い合わせ: 地質情報センター情報管理普及室

Tel. 0298-54-3601

購 入: 地質標本館

Tel. 0298-54-3750

東京地学協会

Tel. 03-261-0809

日本産業技術振興協会

Tel. 0298-52-3388

地学文献センター

Tel. 0423-84-6875

新刊紹介

「いま地球の財産を診る」 番場猛夫 著

教育出版センター, 286ページ, 1,900円 (税込み)

本書は, 長年鉱物資源の調査研究に携わってきた著者が, その専門家としての視点から, 世界的に進行中の資源濫費の傾向に対し, 世に問うた「資源論」である。

第1章で地球について述べているが, 地球上の諸現象から現在の認識に至る過程を簡潔に整理した地学史概論となっている。第2章では鉱物資源の生成を扱い, 鉱床学の発達史, 研究手段から近年の研究成果にも触れている。第3章は鉱物資源の偏在とその探査活動を扱っているが, ここでは著者の専門であったクローム鉱床探査に力点があり, トルコ共和国での経験にも触れられている。この第2及び3章は, 著者の豊富な実践的調査研究に根ざした含蓄のある記述になっており, 読み物としても面白い。第4章は地球規模での鉱物資源の危機的状況について問題点を指摘し, 終章でこれを纏め, 人類の存亡に係わる問題としての対処の方向が著者の主張として述べられている。

本書は, 平易な表現で書かれていて読みやすく, 一般むけ普及書としても良いが, 大学生の一般教養向け読本として最適であろう。文中の専門用語については, 欄外に読みやすい形で解説が加えられ, 引用された文献の主なものについては, 巻末に整理されており, より詳細な学習に対して親切な配慮がなされている。

しかし, 本書の特徴は地球科学の広い分野の問題のポイントを要領良く抽出し, これを学問の発達過程に位置付けて解説していることで, これは, 専門家にとっても, 自らをブラッシュアップするのに又とない適書となっていることにある。更に, 地球規模で資源問題を考える時, 今, 何が必要とされているのかを訴える警世の書ともなっている点は類書に見られない特徴であろう。

なお, 本書の表紙を飾る色刷り写真のオブジェは, 地質調査所の100周年記念に作られたものであり, 元所員である著者の強い希望で使用されることになったとのことである。また, 講入しやすい価格の設定は, 若い人達に対する著者と出版社の配慮でもあろうか。

(地質調査所北海道支所 岡部賢二)